

2 あらすじをつかむ  
・ 章ごとに音読しながら板書を使って構造的にまとめる。(2時)

ここでのねらいは、一つは、物語の全体を見渡し、ごんの行動やその心情の移り変わりをどの子にもつかませることにある。全体像を土台にしないで部分の読みに入ると、どうしても文脈のつながりを無視した、恣意的な読みに陥りがちになるからである。

もう一つのねらいは、ごんの行動の全体を見る中から、これから先詳しく読んで追求してみたい読みの課題を作ることである。大きな読みの課題は、全体を見渡す中で考える方がつかみやすいからである。

あらすじは、子どもたちと話し合いながら次のような形にまとめた。

【「ごんぎつね」のあらすじ】

ごんぎつね

ひとりぼっちの小ぎつね  
しだのいっばいしげった森の中に住んでいる  
いたずらばかりしている。

①

《ある秋のこと》

二、三日雨がふりつづく

兵十が魚つかみ

いたずら  
びくの中の魚をにがしてしまう

←  
兵十に見つかってうなぎが首にきまきついたまにげる。

②

《十日ほどたって》

兵十のおっかあのそう式

「あんないたずらしなけりやよかった。」

③

兵十が井戸のところで  
麦をといでいる

←  
「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」

兵十がいわし屋に  
ぶんなぐられる

←  
いわしをぬすんでなげこむ  
くりをどっさりひろって

←  
次の日も、その次の日も  
くりを拾って持って行ってやる。

④

《月のいいばん》

兵十と加助がお念仏  
に行くときゆう  
「ふしぎなことが」

←  
あとをつけていく

←  
お経がすむまで待っている

⑤

加「そりゃ神様のしわざだぞ」  
毎日神様にお礼をいうがいい」  
←  
兵「うん」

こいつはつまらないな  
おれはひきあわないなあ

⑥

《その明くる日も》

くりを持って出かける。

「あのごんぎつねめ」

「ようし」

「ドン」↓バタリ

「ごんおまえだったのか」

——目をつぶったままうなずく